



The Longest Journeyの一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅沼, 慶一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3212

*The Longest Journey*¹⁾ の一考察

菅沼慶一

A Study of *The Longest Journey*

Keiichi SUGANUMA

Abstract

(1)

The scene of *The Longest Journey* is laid strictly in England and its characteristics are purely English. Forster states in an essay titled *Notes on the English Character* that the English people all have middle-class characteristics, which include the characteristics of 'hypocrisy' and 'lack of imagination'. To understand these qualities, therefore, the author examines Forster's concepts of 'undeveloped heart' and 'real existence.'

(2)

The author traces what is *real* (truthful) or *false* (hypocritical) in some main characters in *The Longest Journey* from the point of view of the structure of the novel.

(3)

The author explains the structure of *The Longest Journey* on roles played by main characters in it and concludes that the tragedy of the hero Rickie is brought about by his wavering between the two domains of Reality and Falsehood.

(1)

E. M. Forster の5つの作品に関しては、異なった見地から2, 3の分類がなされてきた。しかし、*The Longest Journey* (1907)にはどのような分類に於いても包括されなかったように思われる一面がある。それは格別に目新しいことではない。イギリスを舞台とし、純粹のイギリス人だけが登場する作品であるということなのだ。

そういう言い方をすれば、人は直ちに *Howards End* (1910) を思い浮べるに違いない。なるほどイギリスという国に関する限り、ある意味ではこの小説の方が *The Longest Journey* に於けるよりも明確な形を取って現われている。しかし、主人公である Schlegel 姉妹はイギリス人の母とドイツ人の父を持ち、「生粋のイギリス人」(English to backbone)²⁾ではなかった筈だ。云いかえれば、*Howards End* は終始イギリス的な性格の陰影を追った作品ではないのである。

Howards End はその舞台がイギリスであるという点で、*The Longest Journey* と共に「イギリス物」と呼ばれることがある。しかし、「イギリス物」という proviso を単に作品のもつ locality に限って用いるのではなく、イギリス社会のなかで純粹のイギリス人が織りなす思想、感情の綾を取り扱った作品という意味に用いれば、「イギリス物」の名に相応しいのは *The Longest Journey* のみであるということになる。このことがどういう意味をもつのかと云えば、Forster のイギリス人観が最も端的に、しかも最も濃厚にこの作品のなかに表明されているということなのだ。

ここで、Forster の考えていたイギリス人の性格(思想、感情)の特徴を一瞥して置きたい。

Forster は *Notes on the English Character* (1920)³⁾ と題するエッセイのなかで、イギリス社会の中心は中流階級であること、また、イギリス人の性格は本質的に中流階級的であることを述べた後で、

Solidity, caution, integrity, efficiency. Lack of imagination, hypocrisy. These qualities characterize the middle classes in every country, but in England they are national characteristics also, because only in England have the middle classes been in power for one hundred and fifty years.⁴⁾

(堅固、慎重、誠実、能率。想像力の欠如、偽善。これらの性質はいずれの国を問わず中流階級を特徴づけるものであるが、イギリスではそれらは国民性でもあるのだ。何故なら、中流階級が百五十年も権力を揮ったのはイギリスだけだからである。)

と云っている。このなかに挙げられた「堅固、慎重、誠実、能率」の徳目と「想像力の欠如、偽善」とは質的な差としてよりも量の差として説明され得るものと思われるが、それはそれとして、これらの諸性質を理解するためには Forster の云う「未発達的心情」(undeveloped heart) と「実在」(real existence) の概念を中心に、彼の所論を少しく考察してみなければならない。

Forster によれば、「あたかもイギリスの中心が中流階級であるのと同じく、中流階級の中心」をなすのは public school 制度である。この制度は Anglo-Saxon 民族の中流階級によって創り出され(それ故、Ireland や Scotland には見られない)、彼らと共に栄え、彼らの思想、感情の形成に与ったという点で極めて特異なものである。この public school の教育は狭量な愛国心にとらわれて、団体精神 (*esprit de corps*) を鼓吹し、「学校は小規模な世界である」こと、「学校を愛さないものは自分の国を愛することができない」ことを強調する。従って、其処では規律と躰が重んじられ、一定の形式に載って流れて行く精神的姿勢が出来上ってしまう。その結果は冷静な判断力が養われないばかりでなく、個を発揚すること、個人的関係を発達させることは全く顧みられず、「感ずること」すら行儀の悪いことであると見做されるに至るのである。

以上の事実から2つのことが導き出されてくる。

第一に、「感ずること」が行儀の悪いことだと見做される結果、イギリス人は必然的に「感

ずること」を恐れるようになって行く。感ずることができないのではなく、感情を抑制するのである。そして、その抑制が常態となって、感情はますますその自由な、本来的な機能を十分に発揮できなくなってくる。そのように萎縮した、発展性のない感情の状態を Forster は「未発達的心情」と呼ぶのである。

この「未発達的心情」からイギリス人がしばしば非難される幾つかの性格的欠点が生じてくる。イギリス人は矢鱈に感情を表出することなく、それを奥深く蔵して、ある特別の場合に稀れにしか発動しなくなる。また「感ずる」訓練を欠いているので、理解は早い、感ずるのに時間がかかる。こうしたことがイギリス人が冷たいとか、詩が分らないとか、非情緒的だとか云われる理由なのである（「想像力の欠如」という非難もこのなかに含めてよいだろう）。更に、自分に対する非難に向ってこの鈍感さが発揮された場合、独善的だという謗を受けることになるのである。宗教に於いても実際の面が取り上げられて、信仰そのものが奥深さを欠いているのは、直観的な宗教体験が乏しいからであろう。

第二に、イギリス人は一旦行動を起してからその進路を誤ると、性来の愚鈍さのためにうろたえて、自分の真実の姿を見失ってしまう。しかし、批判力に欠けているから、自分の陥った病弊の実態を認識することなく、次第に破滅して行く。この場合、彼は意識的に（人を、そして自己を）欺くのではない。自分では正しいと思っているのであるが、結果的には欺くことになるのである。つまり「無意識的な」(unconscious) 欺瞞—それがイギリス人の「偽善」なのだ。それ故、イギリス人を悪党と呼ぶことはできないのである。

(以上は *Notes on the English Character* に於ける Forster の所論をもとにして、彼の論理の間隙を僕なりに埋めたものである。この場合、undeveloped heart の heart に OED (10. c) “sensibility or tenderness for others” という定義を当てることには同意しかねる⁹⁾。僕はこの heart はそうした感情も含めて SOD (5) “the seat of the emotions generally; the emotional nature; opp. to head OE” であると思う。)

The Longest Journey は「見る人がいなくても牛は存在するか」という学生たちの議論の場合から始まっている。Lionel Trilling の指摘を待たなくてもなく⁹⁾、それ以後この小説の全篇に「実在」(real existence) という概念が1つの比喩的な意味を伴って行きわたっているのであるが、この語はどういう意味をもつものであろうか。それを理解するのに好都合と思われる context を抜き出してみよう。以下は、Rickie が Sawston で墮落して行くのを見て、Ansell と Widdrington が取り交した会話である。まず最初に Widdrington の言葉から始まる。

‘Well, I,’ he continued, ‘am inclined to compare her to an electric light. Click! she’s on. Click! she’s off. No waste. No flicker.’

‘I wish she’d fuse.’

‘She’ll never fuse unless anything was to happen at the main.’

‘What do you mean by the main?’ said Ansell, who always pursued a metaphor

retentlessly.

Widdrington did not know what he meant, and suggested that Ansell should visit Sawston to see whether one could know.

'It is no good me going. I should not find Mrs Elliot: she has no real existence.' 'Rickie has.'

'I very much doubt it. I had two letters from Ilfracombe last April, and I very much doubt that the man who wrote them can exist.' (p. 182)

(「それはそれとして、僕は」と彼は喋り続けた。「あの女を電灯に喩えたい気がするよ。パチン! 点く。パチン! 消える。いささかの無駄もない。いささかの灯のゆらぎもない。)

「いっそ、溶けてくれればいいのだが。」

「決して溶けやしないさ——本線ほんせんに故障でもない限りはね。」

「本線で何を指して云っているのだい?」と Ansell は云った。彼はいつも比喩を容赦なく追求するのだ。

Widdrington は自分で何を指すのか分らなかつた。そして、何が本線なのか1つ Sawston へ確めに行つて来るがよいと Ansell に云った。

「僕が行つても仕様がないうよ。Elliot 夫人は見つからないだろうからね。あの女には実在ひまがないのだから。」

「Rickie にはあるよ。」

「どうだか怪しいもんだ。この4月に Ilfracombe 発の手紙を2通もらったけれど、その手紙の書き主が実在する人間とは考えられなかつたよ。」

この会話から「実在」の概念を導き出すのは容易であろう。そして、Ansell が Rickie と Agnes との婚約に反対して、Agnes が (1) 真面目でないこと (2) 誠実でないこと、を指摘したのを思い出すのである。つまり、「実在」とは「真剣さ」「誠実さ」であり、「己れに対する忠実さ」でもある。「実在」という概念から当然「非実在」の概念が導き出されるのであるが、「非実在」は「偽り」(falsehood) であり、「偽善」である。Forster の「偽善」を理解するためには、先に述べた「無意識的な偽瞞」(unconscious deceit) と共に、この「非実在」の概念からも考えられねばならない。

イギリス中流階級の持つ性格は勿論多種多様である。例えば *The Longest Journey* に見られる Ansell の父親の実直さ、適度の功利心、自由を重んずる精神、そして Rickie の父親 Elliot 氏の高慢、皮肉、残酷、真の美を理解することなく教養人ぶっている俗物根性——2人のもつこうした美点も欠点もすべて中流階級のなかに深く根ざしている。Forster はこれらの性質も含めて大きく「堅固、慎重、誠実、能率。想像力の欠如、偽善」と並べてみせたのである。しかし、これらのうち先の4つの徳目は一步誤れば後の欠点に傾くことになる。云い換えれば、前者は「心情」の未発達の場合、頭の混乱の程度によって容易に後者の非難を蒙ることになるのだ。僕が先に「量の差」として考えられると云つたのはこの意味なのである。

ここでもう一度云おう。イギリス人のしばしば蒙る非難の大部分は感情の未熟さと冷静な判断力の欠如に関係しているのだ。そして、Forster がいかにかしばしば「未発達的心情なのだ——冷やかな心情ではないのだ。」と云い、「イギリス人は不完全な、未熟な民族なのだ。」と云おうとも、彼が作品のなかで専ら諷刺し攻撃するのはこの「想像力の欠如」と「偽善」なのである。そして、この小説で Forster が書こうとしたものはまさしく real なものと false なものとの触れ合いに他ならない。それ故この2つのものを *The Longest Journey* の主要登場人物のなかを探ることによって、この小説の構成を考えてみるができないであろうか。そういう観点から、その主なる登場人物を考察してみたいと思うのである。

(2)

婚約した Rickie と Agnes は Rickie の叔母の Failing 夫人を Cadover 邸を訪れる。Rickie は叔母を尊敬しているが、その不面目な揶揄、残酷さ、皮肉の故に好きになれない。叔母も彼を pedantic で偽善者だと思っている。自然、2人の中の空気は面白くない。すると Agnes は Rickie に、叔母の歓心を買って成功させよう、と云う。Rickie には何を「成功させる」のか理解できない。これが後になって、Agnes が叔母の遺産を狙っていることが明らかにされる件りの巧妙な伏線になっている。

夫人の家に Stephen という青年が厄介になっている。夫人が、Rickie との一寸した云い争いの余波でもあるかのように、Stephen が彼の半兄弟であることを洩したとき、Rickie は驚きの余り失神する。彼が Stephen を父の子であると考えたのも、彼の父に対する感情や、父が町に「父の家」を構えて別居していた事実から考えれば当然であろう（しかし、実は Stephen は Rickie の母の子であり、この誤解がまた作品の綾を深めて行く1つの重要な契機になっている）。

Agnes は Cadover に着いたとき、直ちに「ここには金がある」と直観した。そして、叔母は未亡人で子供がないところから、その遺産は自分たちが相続すべきであると考え、Rickie も同様の考えであると信じて疑わない。「成功させる」と云えば充分 Rickie には意が通ずるものと考えなのだ。そのとき Stephen が Rickie の半兄弟であることが彼女には重大な意味をもつ。更に、彼女は Stephen が Rickie の半兄弟であるということが1つのスキャンダルになることを恐れている。また、Stephen のような乱暴で、野卑で、酒飲みで、不名誉な青年が Rickie に近づくことは好ましくないと考える。従って、それからの後の彼女の Stephen に対する態度はすべて以上のような認識に基づいているのである。Failing 夫人を唆して Stephen を Canada に追いやるように仕向けたことも、Rickie に会いに来た Stephen を彼に会わせずに、金をやって追いやろうとしたことも、すべては彼女なりに正当な理由の裏付けがあるのだ。だから、Rickie が叔母の財産は Stephen が受取るべきだと主張してもその気持が理解できず、

「まあ、あなたの云うことは本当にロマンチックね。」と一笑に付してしまふ。自分がやっていることは正当であるという Agnes の意識は

Oh, it is too bad, when I've saved you from him all these years. (p. 250)

(まあ、あの男から今までずうと^ひかばってあげたのに、ひどすぎるわ。)

という言葉に結晶されている。そこに Agnes の救い難い偽善と独善が見られるのだ。

Agnes の兄の Herbert に代表される Sawston School の俗物性は (1) に於いて述べた如く public school の教育に共通するその画一的団体教育に根差すものである。Herbert の口にする理想は Forster の挙げた public school の綱領と全く一致する。

Rickie は Agnes と結婚して Sawston School の古典語の助教師となる。しかし、彼の教師としての理想は Herbert によって悉く打ち破られて行く。Herbert は教師は権威者として教壇に立つべきことを主張し、体面を重んじてそれ以上に大切なもののあることに気がつかない。また、彼は寄宿舎制度によって生徒に団体精神を植えつけ、規律を与えようとする。そして、このことにあまり価値を認めない同僚の Hellenist である Jackson に敵意を抱く。Rickie は学友 Widdrington のいところでもあり叔父の Failing 氏の友人でもある Jackson に親しみを感じて接近して行き、その豊かな学識と自由思想に惹きつけられる。しかし、Herbert は「Jackson は反動で、組織化の力もないのに自分の意見を他人に押しつける人物だ」と評する。

たまたま、Vardon という生徒が寄宿舎を出て、親でも身元引受人でもない Orr 夫人のところへ寄寓する。寄宿舎の監督である Herbert は団体生活を乱すものと考えてこれを黙視できない。その蔭には通学生 (day-boys) の監督である Jackson の許可があったことを知り、且つ Orr 夫人が曾て結婚を申込んで断られた相手でもあったから、自分は表面に出ずに Rickie に云いつけて校長に訴えさせ、Vardon を寄宿舎に戻すようにさし向ける。

こうしたこと一切が Rickie の性格や思想とはかけ離れていて、彼は非常に不満を感じる。しかし、「教師は同一歩調で進まねばならない。さもないと——收拾がつかなくなる。」と云う Herbert の言葉に引きずられて次第に自主性を失ない、「全く不思議にも、形の上ではうるさ型となってしまった」のである。

しかし、Rickie の悩みは Agnes には一向通じない。「現実の生活は彼女にとって余りになまなましく思われるらしく、所謂詩情と呼ばれる影と堅硬物との結合を彼女は発見することができなかつた。」そして、Rickie が Sawston School に対する不満を洩らして

They don't realize that human beings are simply marvellous. When they do, the whole of life changes, and you get the true thing. But don't pretend you've got it before you have. Patriotism and *esprit de corps* are very well, but masters a little forget that they must grow from a sentiment. They cannot create one. Cannot—cannot—cannot. (p. 174)

(皆は人間が本当に素晴らしいことが分らないのだ。分れば全人生は変わってくるし、君

も本当のものがつかめるのだ。しかし、手に入れるまではつかんでいるふりをしないでほしい。そりやあ愛国心も団体精神も結構だが、教師たちはそれが1つの情操から生じてくるに違いないことを聊か忘れていたのだ。彼らにはその情操を創ることは絶対できないのだ——絶対に。)

と述べても、Agnes は異端だときめつけてしまうのだ。Rickie は次第に孤独へと追いやられてしまう。それが2人の結婚生活にもひびが入ってくるきっかけとなって行く。Forster はそれをこう説明する。

He valued emotion—not for itself, but because it is the only final path to intimacy. She, ever robust and practical, always discouraged him. She was not cold; she would willingly embrace him. But she hated being upset, and would laugh or thrust him off when his voice grew serious. (pp. 171-172)

(彼は情感を——それ自体のためではなく、親密さに至るにはそれが唯一の道だからこそ——重んじた。彼女は相変らず逞しく实际的であったが、いつも彼を失望させた。彼女は冷たかったのではない。彼女は喜んで彼を抱擁しようとした。しかし、どうしてよいか分らなくなるのが嫌だったから、彼の声が真剣味を帯びてくると、笑いにまぎらしたり受けつけなかつたりするのであった。)

これこそ「冷たい」とか「非情緒的」だとか云われる「未発達的心情」そのものであり、偽善への道ではないだろうか。

Herbert の人物を見ると生真面目で、理想に燃え、彼は彼なりに最善と思う道に進んでいるように思われる。それにもかかわらず何処か喜劇的人物のように感じられるのは何故であろうか。彼は「親切で利己心がなく」、「真に慈悲深く」、「勤勉で良心的で」、「愛情を注ぐことができ」、「礼儀正しく寛大である」一見非の打ちどころがない立派な人物なのだ。しかし、Forster は云う。

Then what was amiss? Why, in spite of all these qualities, should Rickie feel that there was something wrong with him—nay, that he was wrong as a whole, and that if the Spirit of Humanity should ever hold a judgement he would assuredly be classed among the goats? The answer at first sight appeared a graceless one—it was that Herbert was stupid. Not stupid in the ordinary sense—he had a business-like brain, and acquired knowledge easily—but stupid in the important sense: his whole life was coloured by a contempt of the intellect. (pp. 169-170)

(それでは何処が悪いのか。以上のような性質があるにもかかわらず、何故 Rickie は彼には何処が悪いところがある——いや、全体的に悪い、しかも、「人間性の霊」がもし判断を下すものとすれば、彼はきっと山羊の仲間に入れられてしまうだろう、と感じざるを得ないのであろうか。答は一見したところ無慈悲なもののように見えた——それは、Herbert は馬鹿だということであった。普通の意味で馬鹿なのではない——彼はてきぱきした頭脳をもち、直ぐ知識を吸収する——しかし、重大な意味で馬鹿なのだ。彼の全生活は知識人に対する軽蔑感で色どられていた。)

Jackson を毛嫌いしたのも彼が「第一級の知性を持っている」からであろうし、Ansell に対する態度もこのことから説明されるであろう。しかし、いずれにせよ、彼の知識人に対する軽蔑感の裏を返せば inferiority complex であり、その意味に於いて「偽り」(falsehood) と云えるのではなからうか。彼が真剣になればなるほどこの「偽り」が目立ってくるのであり、彼の全体が偽善の幕に覆われて行く。そして意外な結末に忙然とする彼の姿がわれわれの喜劇的な笑いを誘うのである。Forster の小説がしばしば Jane Austen の世界に比較されるのも、一つにはこうした喜劇性のせいであろうと思われる。

Failing 夫人は自分を因襲にとらわれない、非常に自由な思想の持ち主に見せかけようとする。その昔、Rickie の母親と Robert 青年の恋を支持し、馳け落ちした2人を「神聖だ」と讃え、「神の目から見れば罪がない」と云ったのは彼女であった。そして、Rickie に対しては

We all fell in love with your mother. I wish she would have fallen in love with us. She couldn't bear me, could she? (p. 98)

(わたしたちは皆あなたのお母さんが好きでした。お母さんにもわたしたちを好きになってほしかったと思いますよ。わたしには我慢ができなかったと云っていたでしょう?)

と云うのである。しかし、Robert と死に別れて家に連れ戻された Rickie の母親が魂の抜け殻のようになっているとき、真に彼女を慰めて面倒を見たのは夫人ではなく、その夫の Failing 氏だったのである。

Failing 夫人の気まぐれな新らしがりとも見える虚栄心は、彼女の結婚自体についても云えるであろう。

Mr. Failing was the author of some brilliant books on socialism—that was why his wife married him—and for twenty-five years he reigned up at Cadover and tried to put his theories into practice. He believed that things could be kept together by accenting the similarities, not the differences of men. ‘We are all much more alike than we confess’ was one of his favourite speeches. As a speech it sounded very well, and his wife had applauded; but when it resulted in hard work, evenings in the reading-room, mixed parties, and long unobtrusive talks with dull people, she got bored. In her piquant way she declared that she was not going to love her husband, and succeeded. He took it quietly, but his brilliancy decreased. His health grew worse, and he knew that when he died there was no one to carry on his work. He felt, besides, that he had done very little. (pp. 103-104)

(Failing 氏は社会主義に関する数冊の卓れた書物の著者であった——それが彼の妻が彼と結婚した理由であった——そして25年の間 Cadover に君臨し、自分の理論を実践に移そうとした。彼は人間の差異ではなく類似点を強調することによって、すべての事柄が緊密になり得ると信じた。「われわれは皆考えている以上に遙かに似ているものなのだ、」というのが自慢の科白であった。演説としてはとても立派に聞えたの

で、妻は拍手を送った。しかし、その結果が昼間はせっせと働き、夜は書斎に閉じこもったり、混合パーティをやったり、退屈な連中と長たらしい慎しみ深い話合いをしたりするようになると、彼女は飽き飽きしてしまった。彼女はいらいらしながら、夫をこれ以上愛しては行けないと宣言して、勝利を収めた。彼はその言葉を静かに受け入れたが、才気は消えて行った。次第に健康が衰え始めた。そして、死んで行くとき、彼は誰も自分の仕事を引き継いでくれる者のいないことを知っていた。その上、自分のやってきたことが如何に些細なものであったかを感じていた。)

こうした夫人の気まぐれはその性来の高慢さ、皮肉さと相まって、自分の身の廻りの者に対する揶揄となって表われる。この小説に彼女が登場して間もなく、われわれは彼女の Stephen に対する執拗な揶揄を見るのである。同時に、彼女の人生に対する不真面目さは次の Rickie の言葉によっても知られよう。

If she thought it really funny, for instance, to break off our engagement, she'd try. (p. 106)

(例えば、僕たちの婚約を邪魔するのが面白いと思えば、叔母さんはきっとそうするだろうよ。)

このような夫人の心理の底には Elliot 家を流れる呪わしいちんばの遺伝によって形成された暗い、歪んだ性格があるであろうことは否定できない。Forster の口をかりれば

Weakly people, if they are not careful, hate one another, and when the weakness is hereditary the temptation increases. (p. 127)

(病弱な人びとは注意しないとお互いに憎み合うようになる。そして、その病弱さが遺伝であるような場合、憎みたい気持は増すものだ。)

という気持が夫人にはあるのだ。曾て彼女が Rickie に向って「あなたのお父さんと私とはお互いに憎み合っていました、」と云った言葉が思い出されるのである。それは、また、Rickie の母親が Elliot 家に嫁ついで間もなく、「辛辣な皮肉を云い、ちんばを曳き、洗練された言動をする以外に Elliot 家の人びとは何をやったというのが、」と感じた非生産的な雰囲気発展して行く。婚約した Rickie と Agnes が夫人を訪ねたとき、2 人の間を意地悪く引き離そうとして Rickie と Stephen を馬の遠乗りに出した夫人は Rickie の幸福を羨んでいたのであり、その羨望の奥には憎しみが働いていたのである。

このような歪んだ性格は周囲の者にも及んで、健康や美に対する嫉妬となって表われてくる。それが嘲笑となり、揶揄となり、不謹慎さとなって、読者の眉をひそめさせるのである。Lionel Trilling の指摘するように⁷⁾、人生を嘲笑的に見る点で「十八世紀の俗物の一種の空想画」に墮しているのである。それが Rickie が Cadover 去るとき夫人に云った

You used to puzzle me, Aunt Emily, but I understand you at last. You have forgotten what other people are like. Continued selfishness leads to that. I am

sure of it. I see now how you look at the world. "Nice of me to be shocked!" I want to go tomorrow, if I may.' (p. 145)

(あなたは僕にわからないことがよくありました、Emily 叔母さん。でも、とうとう分りましたよ。あなたは他の人びとがどのようなものであるか忘れてしまったのです。長く利己心をもち続けたためそうなったのです。きっとそうに違いありません。今こそあなたが世間をどう見ているかが分りました。「驚くのが私のいいところ」ですって！ できれば明日帰ります。)

という言葉の意味であろう。この言葉はその後暫らく夫人を怒らせる結果になったけれども、夫人の欠点を鋭く突いているのである。

Don't you think there are two great things in life that we ought to aim at—truth and kindness? Let's have both if we can, but let's be sure of having one or the other. My aunt gives up both for the sake of being funny. (p. 128)

(人生にはわれわれの目ざすべき偉大なものが二つあって、それは真実と親切だ、と君は思いませんか？ できれば二つながらもつに越したことはないけれど、どちらか一方だけでも必ずもつようにしたいものです。叔母さんは人に面白いと云われようと、二つとも棄ててしまったのですよ。)

これは Rickie が Agnes に語った言葉であるが、云うまでもなく夫人の偽り（偽善）と「冷たさ」を指摘したものである。しかし、夫人の性格がやや不健全な、病的な印象を与える点に於いて、Agnes のそれとは質を異にしていると云えるであろう。

Failing 氏について一言して置かなければならない。この人物についての短い記述のなかから、われわれは彼もまた Rickie の母と同様に Elliot 家のいびつな性格の犠牲者であったことを知る。しかし、彼は熱烈な理想主義者であり、誠実な人間であった。そして、彼の精神は Failing 夫人の指摘する如く Rickie に受け継がれて行くのである。

Stephen は 14 歳のとき盗みを犯して学校を追われ、それ以後は満足な教育も受けず、気まぐれで、乱暴で、酒好きの青年である。Rickie の母と若い百姓 Robert との灼熱と呼ぶに相応しい恋の所産であったから、「彼は詩情と反逆の子であり、詩情が彼の脈を走っているのも当然であった。」彼が最も生き生きとしているのは喧嘩のときであり、酒を飲んでいるときである。自らが自らの立法であるような自然児——それが Stephen である。そして、行きずりの兵士と意気投合して酒を飲み、恩のある Failing 夫人を歌いこんだ野卑な歌を歌い、一緒に行った Rickie の感情を全く無視した傍若無人の振舞いをする Stephen は

the chief characteristics of a hero are infinite disregard for the feelings of others, plus general inability to understand them. (p. 109)

(英雄の特徴は他人の感情をどこまでも無視することに加えて、他人の感情を総じて理解できないことです。)

と云った Failing 夫人の言葉そのままに、やはり英雄と呼ぶべきなのであろう。しかし、そこには己れに対する忠実さが野性的な vitality をともなって発揮されていることも事実なのである。

Stephen が Cadover を追い出されてから Rickie に会いに来たとき、Forster は彼の気持ちをこう説明している。

He only held the creed of 'here am I and there are you', and therefore class distinctions were trivial things to him, and life no decorous scheme, but a personal combat or personal truce. For the same reason ancestry also was trivial, and a man not the dearer because the same woman was mother to them both. Yet it seemed worth while to go to Sawston with the news. (p. 244)

(彼は「自分は自分、人は人」という信条をもっていたにすぎない。だから、階級差も彼には取るに足らぬことであったし、人生も何ら厳粛な営みではなく、個人的な戦闘と休戦でしかなかった。同じ理由から先祖もくだらぬものであったし、同じ母親をもっているからということで1人の人間がそれだけ親しいものになるわけでもなかった。けれども、そのニュースを Sawston に持って行くことは価値あるもののように思われた。)

この一文は Stephen の面目を余すところなく伝えている。彼は自分の知った秘密を自分の胸にしまって置くことができず、Rickie に知らせたかったのである。これは、Rickie が自分たちが半兄弟であることを Stephen に知らせなければならぬと思いつつも遂に果せなかった事実と対照をなしている。しかし、Agnes にはこの Stephen の気持が理解できなかった。

Agnes に追い返されて10日ばかりたってから再び Dunwood House を訪れた Stephen はしきりに詫びて自分と一緒に住んでほしいと嘆願する Rickie の心のなかに嘘があることを看破する。それは、Rickie が Stephen そのものを愛しているのではなく、母の面影の一部として、云いかえれば母の追憶を通して、Stephen を愛そうとしていることである。Stephen は母の写真をズタズタに引き裂いて、Rickie の顔に投げ捨てる。ここにも Stephen の真実を求める熱情の迸りが見られるのである。

Ansell は Stephen を評して、今まで会った最も偉大な人間の一人だと云った。その「偉大」という言葉は、Ansell の乏しい経験では律し切れないような野性的な vitality をもった、偽りのない、赤裸々な Stephen の人間像に冠した形容詞だったのである。

哲学青年 Ansell は一見観念的の思弁家で世俗を超越しているように見えるが、実はその奥には激しい熱情と行動力をひめている。彼のこの小説に於ける意味は、この小説の最初の場面から Agnes を徹底的に否定したこと、Agnes が想像力に欠け偽善者であることを見抜いて、Agnes と最後まで戦ったことにある。Rickie が Agnes と婚約したことを知った Ansell は Tiliard に向って

'She is happy because she has conquered; he is happy because he has at last hung all the world's beauty on to a single peg. He was always trying to do it. He used to call the peg humanity. Will either of these happiness last? His can't. Hers only for a time. I fight this woman not only because she fights me, but because I foresee the most appalling catastrophe. She wants Rickie partly to replace another man whom she lost two years ago, partly to make some thing out of him. He is to write. In time she will get sick of this. He won't get famous. She will only see how thin he is and how lame. She will long for a jollier husband, and I don't blame her. And, having made him thoroughly miserable and degraded, she will bolt—if she can do it like a lady. (p. 86)

(彼女は征服したのだから幸福だし、彼の方はとうとう全世界の美を1本の杭の上に繋ぎとめたのだから、これまた幸福だ。彼はそれを実現しようといつも努めていたのだから。その杭のことをよく人間性と呼んでいた。2人の幸福はどちらも長続きするだろうか。彼の幸福は続かない。彼女の幸福もほんの一時だけだ。彼女の方から闘いを挑んでくるからということばかりでなく、最も驚くべき破局が予測できるから、僕はこの女性と闘うのだ。彼女が Rickie をほしがるのは、一つには2年前に失った今1人の男の代りをさせるため、一つには Rickie から何か得をしてやろうとするためだ。Rickie は書く。やがて、彼女はこれに厭きる。Rickie は決して有名にならないよ。彼女はただ Rickie という男が何と瘦せたちんばだろうと思うだけだ。もっと陽気な夫が欲しくなるだろうし、それももっともな話だ。そして、Rickie を徹底的にみじめに墮落させて置いて、逃げて行くだらう——体面を保ちながらそれができればの話だが。)

と云う。これは恐しい予言であり、ある意味でこの小説の展開の方向を予測している。しかし只一つだけ思い違いがある。それは、後になって彼女は自分の結婚が失敗であったことに気づき、夫がもっと美貌で、将来性がある、毅然としたところがあってほしいと願ったけれども、「逃げて行く」ことはしなかった。仕方がないと諦めることを知っていた。「彼女は——必ずしも高尚なタイプというわけではないが——一度、それも只一度だけ恋をするタイプの女性だった」のである。そうした女性もあることを知らなかったところに Ansell の観念性があるように思われる。

Ansell が Rickie に向って結婚を思いとどまるようにすすめた手紙は非常に卒直且つ辛辣である。

You are not a person who ought to marry at all. You are unfitted in body: that we once discussed. You are also unfitted in soul: you want and you need to like many people, and a man of that sort ought not to marry. 'You never were attached to that great sect' who can like one person only, and if you try to enter it, you will find destruction. (p. 86)

(君は全く結婚すべき人間じゃない。君は体に欠陥がある。そのことは一度論じ合っ

たことがある。また、君は魂に欠陥がある。君は多くの人を好きになりたいと思っているし、また、君にはそれが必要だ。そういう種類の人間は結婚すべきではない。「君は決して」ただ1人の人だけを好きになれるような「あの偉大な連中のなかには入れなかった。」そして、もしそのなかに入ろうとすれば、きつと破滅するだろう。)

しかし、その辛辣さには溢れるばかりの友情がこめられていることが分るのである。

たまたま Sawston にいこの Jackson を訪れた Widdrington は Rickie が置かれている状態を観察して帰り、Ansell に Rickie を訪ねてやってほしいと頼む。Ansell は Rickie からたわごとを聞く位なら、行かぬ方がいいと冷たく云い放つ (Ansell は Rickie から来た手紙には真情がこもっていないと考えて、Rickie がともすれば「獄舎からの呼び声」(a cry from prison) になりがちな哀願の調子をその手紙から追いはらう努力をしたことを知らないのだ)。しかし、次の瞬間には

‘When the moment comes I shall hit out like any ploughboy. Don’t believe those lies about intellectual people. They’re only written to soothe the majority. Do you suppose, with the world as it is, that it’s an easy matter to keep quiet? Do you suppose that I didn’t want to rescue him from that ghastly woman? Action! Nothing’s easier than action; as fools testify. But I want to act rightly.’ (p. 184)

(「ときが来れば農夫の如く打って出るよ。知性的な人間に関するそんな偏見は信じてはいけない。そんなことは大多数を満足させるために書かれたに過ぎない。現状のような世のなかに、おとなしくしていることが容易なことだと思ふのか。僕があのおいましい女から彼を救い出したくないと思ったと考えるのか。行動だつて！ 行動ほど容易なものはないということは馬鹿者どもの例に見る通りだ。しかし、僕は同じ行動をするなら壺をはずしたくないのだ。)

と云う。妹の Maud は Ansell を評して

‘My brother is a very peculiar person, and we ladies can’t understand him. But I know one thing, and that’s that he has a reason all around for what he does.’ (p. 201)

(兄は大変風変わりで、わたしたち女性には理解できません。しかし、ただ一つ云えるのは、兄は自分のやることにすべてはつきりした理由をもっているということです。)

と云ったが、Ansell の行動はすべてこうした自信に支えられているのである。彼の行動は時として奇異に思われるが、しかし、われわれがそこに感ずる一種の痛快さ、爽快さは自信に満ちた熱情に起因するように思われる。

Ansell が Dunwood House の食堂で Rickie と Agnes を非難攻撃する場面はこの小説の climax と云えるであろう。食堂に通された Ansell は其処へ Stephen が訪ねてきたか否かを尋ねる。どうやら Agnes が Stephen を Rickie に会わせずに追いかえしたらしいこと、また、Rickie もそのことを承知しているらしいことを知った Ansell は怒りを爆発させ、全生徒の前

で激しく Rickie を非難する。そして、第 1 に Stephen が偉大な人物であること、第 2 に Stephen は Rickie の父の子ではなく母の子であることを告げる。Rickie は失神してしまう。

その後自分の非を悟り、Stephen への真の愛情にめざめた Rickie は、Agnes の元を去って、Stephen と 2 人で Ansell の家に厄介になる。そして、Agnes は自分たちの破局の原因はすべて Ansell にあると考えて、彼を恨むのである。

Gerald Dawes という青年は作者が意識的に Rickie の antithesis として創造したものである。両者は性格、容貌、態度が全く反対である上に、ちんばで虚弱な Rickie とは違い、Gerald は逞ましい、均整のとれた体軀のスポーツマンで、万事人目を惹く華やかな伊達男である。更に決定的な対立点は、2 人が学童であった頃（この物語の始まる以前であるが、Gerald は Rickie を殴ったり、つねったり、腕をねじ上げたり、あらゆる悪戯をしかけたりしていじめたことである。「Rickie と Gerald の間にはわれわれの想像以上に生活を暗くする影があったのである。」

たまたまクリスマス休暇を利用して Pembroke 家を訪れた Rickie は、其処で Gerald と顔を合わせる羽目になる。Rickie は Agnes に対する Gerald の態度が非常に「不作法で、粗野で、冷たい」のを見て、2 人は愛し合っていないと考える。しかし、2 人の愛の場面を垣間見て、Rickie は自分の知らぬ愛の世界に圧倒されながら去って行く。

その Gerald がフットボールの試合中の事故で死んでしまうと、Rickie は Agnes を心から慰めて

'It's the worst thing that can ever happen to you in all your life, and you've got to mind it—you've got to mind it. They'll come saying, "Bear up—trust to time." No, no; they're wrong. Mind it—I did not come to comfort you. I came to see that you mind. He is in heaven, Agnes. The greatest thing is over.' (pp. 58-59)⁹⁾

(「あなたの一生のうちでこれほどの不幸がまたと起ろうとは思えません。忘れてはいけませんよ——忘れてはいけませんよ。人は『元気を出しなさい——時がたてば忘れまます』などと云いに来るかも知れませんが、とんでもないことです。忘れていけませんよ……あなたを慰めに来たのではなく、忘れて戴きたくないと思ってやってきたのです。彼は天にいます。最も偉大なことは終わったのです。)」

と云う。この言葉は Agnes がそれまでちんばの、ひ弱い、汚らしい男の子と考えていた Rickie を初めて一人前の立派な男性として意識する重要なきっかけなのであるが、このなかの「最も偉大なこと」というのは Agnes と Gerald の愛の場面に Rickie が感じた厳肅さを讃嘆する形容詞であり、Stephen を「偉大」と呼んだ Ansell の場合と軌を同じくするものである。

Gerald は死後 Rex Warner の云うように「不自然に神格化されて」しまい⁹⁾、その人格は精神面と肉体面とに二分され、「歴史の Gerald」(Gerald of history) と「ロマンスの Gerald」

(Gerald of romance) になるのである。Agnes は Gerald が昔 Rickie をいじめた話を聞いて Gerald をたしなめはしたが、「遅ましい男の子の手にしっかりと押えつけられた弱々しい男の子を想像したとき、ぞっとするような歓喜を感じずるのだった。」つまり、Agnes が惹れていたのは Gerald の遅しい肉体なのであり、彼女にとって彼の体は偽ることのない真実であった。「ロマンスの Gerald」こそ Agnes にとっては生き生きと感じられる実在であったのだ。Dunwood House に酔って闖入した Stephen の体を見て Agnes が思わず Gerald の名を口走ったのは、このような「ロマンスの Gerald」への追慕の情だったのである。その意味で Gransden が

Dawes is sexually real, spiritually false, real as a lover but not as a man.¹⁰⁾

(Dawes は性的に真実で、精神的には偽りである。恋人としては真実で、人間としては真実ではない。)

と云ったのは正しいであろう。

主人公 Rickie は理想主義な、美に憧れをもつ、内向的な青年(その内向性はちんばであるという事実によって強められている)である。しかし、彼の誤りの第一歩は Agnes をこの上なく立派な女性であると考え、Agnes によって自分も向上し得ると考えたことにある。そして、この点で Agnes は彼の「病める想像力の主観的産物」(the subjective product of a diseased imagination)であった。彼が Gerald と Agnes の結婚資金として百ポンドの金を提供しようとしたとき、彼の云った言葉は Gerald の口を通してこう伝えられる。

He says he can't even marry, owing to his foot. It wouldn't be fair to posterity. His grandfather was crooked, his father too, and he's as bad. He thinks that it's hereditary, and may get worse next generation. He's discussed it all over with other Undergrads. A bright lot they must be. He daren't risk having any children. Hence the hundred quid. (pp. 55-56)

(彼は足のために結婚できないと云っている。子供が可哀そうだって。お祖父さんもちんばだったし、父親もそうだし、自分もそうだからね。彼はそれが遺伝だから、次代の子供たちにはもっとひどく表われるかも知れないと考えている。その問題については仲間の大学生たちと随分論じ合ったのだ。連中は頭がいいのだね。とにかく、彼は子供をもつことはしないそうだ。それで百ポンド呉れるというわけなのだ。)

この言葉自体のなかには一種の悲愴感があるのであるが、その後の Rickie は全くこの恐怖を忘れてしまわれかの如く振舞うのであり、Agnes と愛を誓う場面に於いても、結婚生活に於いても、その不安は全く触れられていない(この言葉は一時的な英雄主義から発せられたのではなかろうかという印象もその点から生ずるのであるが、それは作者に聞いてみなければ分らぬ問題であろう)。とにかく、Rickie には女性に対する強い憧れが見られるのであり、1人の女性と結合した喜びが自分の血を流れる遺伝への恐怖を忘れさせてしまったのであろうか。

Agnes と Rickie が Madingley Hall の近くにある白堊の小さな谷で愛を誓い合ったこと

は非常に象徴的である。何故なら、その谷は Rickie には「好きなことは何をやっても構わないが、やったことはすべて神々しくなってしまうような教会」であったからである。この谷に Forster の所謂「土地の靈」(genius loci)¹¹⁾を認めてよいと思われるが、この場所で2人が愛を誓ったことは、Rickie にはそれだけ余計に自分たちの愛の正当性を確信することになるのである。

Rickie が自分より年上の Agnes に愛を感じたのは、彼女に自分の母の面影を認めたからであろう。あるいは、母性愛を求めたからだと言った方が適切かも知れない。いずれにせよ、彼の母親に対する愛情はこの小説の全篇に貫ぬいていて、それが色々の点で Stephen に対する「偽り」を作るに至ったことも見逃せないのである。

今一つ Rickie に欠けていたのは、人を憎むことであった。もし、彼が Herbert を憎み、Agnes を憎んでいたら、事態は変っていたかも知れない。しかも、彼は人を憎まないばかりでなく、積極的に人を愛そうとした。Ansell のように、人を憎まぬことは犯罪であり、すべての人を愛しようとすることは不可能というよりも悪いことなのだと云い切ることができたら、彼の悲劇は生じなかったかも知れない。Forster は

Now, Rickie's intellect was not remarkable. He came to his worthier results rather by imagination and instinct than by logic. (p. 170)

(さて、Rickie の知性は素晴らしいものではなかった。彼は理論よりも想像力と本能とによって一段価値ある結果に到達するのであった。)

と書いた。そこに Ansell ほどの自信もなく、(生半可な知性のために) Stephen ほど徹底もできない原因がある。そして、彼の悲劇のものはそのような性格にあったと云えるのではなからうか。

(3)

この小説のテーマが real なもの (真実) と false なもの (偽善) との触れ合いにあるとする立場から、主な登場人物のなかにこの2つの性質を追ってきた。Agnes, Herbert, Failing 夫人にはそれぞれ異なった性格が認められるが、表面に表われるところは一致して「偽り」である。Failing 氏, Stephen, Ansell は real なものをもっている。殊に Ansell の知性に裏付けされた自信を伴った正義感と、自然児 Stephen の自己に忠実な真情とは対象をなすものであり、「real な存在」の二面と云える。だから、2人が Sawston でささいなことから喧嘩をして仲直りしたことは、知性と野性とが統一された意味をもつことであり、興味深いものがある¹²⁾。

Gerald は二面を持っており、精神面と肉体面とに分離されて考えられるようになって行く。そして、その精神面はあまり価値をもたないが、肉体面は少くとも Agnes にとって真実であった。その Gerald の価値のない面で価値をもち、彼の real な面で real でないのが主人公

の Rickie であると云えるだろう。ちんばでひ弱い Rickie の体は Agnes にとって何の魅力もなかったのであった。

主人公 Rickie は真実の世界と偽りの世界の両方に跨る存在である。Agnes や Herbert によって偽りの世界に引き入れられ、Stephen や Ansell によって真実の世界に呼びもどされる——それがこの小説の筋であると云えるだろう。彼は優しく、感受性に富み、理想に燃える青年であった。そして Sawston に於いて苦しんだ理由は

For Rickie suffered from the Primal Curse, which is not—as the Authorized Version suggests—the knowledge of good and evil, but the knowledge of good-and-evil. (p. 175)

(なぜなら、Rickie は「本源的な罰」を受けていたのであり、それは——欽定聖書の述べる如く——善と悪を区別できることではなく、「善にして悪なるもの」を知ることである。)

と与えられている。ここで云う「善にして悪なるもの」とは Forster 的な意味に於ける「偽善」に他ならないだろう。しかし、そうした立派な美德も能力も彼を一定の方向に安定させることはできなかった。彼の不安定性は全く彼の性格に帰因するものである。そして、Rickie は最後に Failing 夫人に向って「われわれの破局の原因は僕の性格にあるので、結婚にあるのではありません、」と云うのである。

Ansell について最後に一言しよう。作者が Rickie に抱いている限りない愛情と同情は、Ansell を通じてこの小説のなかに具体化されて行くのである。云い換えれば、Ansell の視線は作者の目なのである。そして、Ansell の真情は作者の胸中であり、Ansell の口を通して語られる人生哲学は作者の人生観なのである。その意味で、Rickie は作者の主観であり、Ansell は作者の客観であるとも云えるように思われる。

(注)

- 1) テキストには Penguin (1960) 版を用いた。以下引用文の最後に対した頁数はすべて同書のものである。
- 2) *Howards End* (Penguin, 1961) p. 28.
- 3) 評論集 *Abinger Harvest* (1936) の巻頭に収められている。
- 4) *Abinger Harvest* (Arnold, 1961) p. 11.
- 5) cf. 永嶋大典：中産階級と人間関係—E. M. Forster 論—(『英国小説研究』第五冊(篠崎書林, 昭和36年) 所載。同書 p. 4 footnote)
- 6) 「愉しげではあるが明らかに取るに足らないこの情景が、実はこの小説が扱おうとするものを表わしている。つまり、実在—実在と見せかけ—に関係している。そして、『実在の』という言葉はこの小説中に幾度となく繰り返えられるのである。」—Lionel Trilling: *E. M. Forster* (The Hogarth Press, 1962) p. 67.
- 7) *ibid.* p. 73.
- 8) 「Rickie が Agnes に Gerald の死を忘れるなど強調するのは、イギリス人が感情を恐れることに対する非難であると同時に、悲劇の前には自由精神もなす術を知らないことに対する非難でもある。」Lionel

Trilling: op. cit. p. 22.

- 9) Rex Warner: *E. M. Forster* (多田幸藏訳) (研究社, 昭和31年) p. 20.
- 10) K. W. Gransden: *E. M. Forster* (Writers and Critics), (Oliver and Boyd, 1962) p. 51.
- 11) Forster にあっては、土地には霊があって人間の運命に関与するという思想がある。
- 12) Gransden は「Ansell と Stephen は実在の互いに補足的な二面となっている、」と云う。op. cit. p. 51.
また、Lionel Trilling は「喧嘩の理由は馬鹿げたものであり、まるで小さな子供のように振舞う。このように、親しい友だちとなる前に知性と心情に肉体的喧嘩をさせるのは全く Forster 的である、」と云う。op. cit. p. 80.

参 考 文 献

上に引用した文献の他に下記文献を参考にした。

- 1) J. B. Beer: *The Achievement of E. M. Forster* (Chatto & Windus, 1962).
- 2) James McConkey: *The Novels of E. M. Forster* (Cornell University Press, 1958).
- 3) F. R. Leavis: *The Common Pursuit* (Chatto & Windus, 1958).
- 4) 飯沼馨編: *作家と政治* (研究社, 昭和33年).
- 5) 吉田健一: *英国の文学* (垂水書房, 昭和38年).